

旧長瀬綜合博物館から寄贈された和同開珎について

水口由紀子

はじめに

長瀬綜合博物館は、眼科医の塩谷覚三郎氏しおのやかくさぶろうが長年にわたって収集した資料を保存、展示していた博物館だったが、平成25年3月31日に閉館した。その後、収蔵資料は一括して埼玉県に寄贈され、資料の性格によって4つの県立博物館（歴史と民俗の博物館・さきたま史跡の博物館・嵐山史跡の博物館・自然の博物館）に分けて収蔵された。

さきたま史跡の博物館は考古資料を受け入れたが、その中には、国指定重要文化財の「十鈴鏡」や埼玉県指定文化財の「笑う埴輪」、「古瓦」など指定文化財も含まれている。

さきたま史跡の博物館ではこれらの寄贈資料の中から主要なものをテーマ展「新収蔵品展～旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料」（会期：平成28年2月20日から6月12日）で展示公開した。

本稿では、その際に展示した和同開珎2点をここで紹介し、その来歴や資料としての位置づけを行いたい。

1 広島県呉市亀ヶ首出土和同開珎（写真1）

この和同開珎は外径約2.5センチ、厚さ0.15～0.2センチ、重さ3.7グラムあり、穿は埋まっている。銭の縁の2か所にバリが少し残っている。縦6センチ、横9.9センチの台紙に糸で固定されていた。台紙に残る針孔から3度位置を変えて固定されたことを読み取ることができる。また、画鉢の痕が二か所あり、画鉢で壁か台に固定して展示されていたと考えられる。

右端に下記のように由来が万年筆で書かれている。インクの退色は進んでいる。

安藝瀬戸島亀ヶ首海軍発射場

鋳曳所ノ址ト思ハル

四五.一.四. 有坂鉛藏氏ヨリ

（※台紙左下端の「391」という数字は埼玉県に受け入れる際に付けた仮番号である。）

（1）台紙の文言の検討

①「安藝瀬戸島亀ヶ首」

「安藝瀬戸島亀ヶ首」は現在の行政区では広島県呉市にあたり、市の南西部にある倉橋島に現在も「亀ヶ首」という地名が地図上で確認できる（図1）。江戸時代は倉橋島の北部の東半分が「瀬戸島村」で、明治39年に音戸町おんどとなった。台紙に書かれている「瀬戸島」はこの「瀬戸島村」を指しているものと思われるが、亀ヶ首はこの台紙が書かれた当時は「倉橋島村」の範囲であったと推定される。

「亀ヶ首」は倉橋島の東部で、亀の首のように屈曲しながら瀬戸内海に突き出た半島の先端にあたる。平安時代末期の歌人源俊頼がこの場所を詠んだ次の句から、ここには潮待ちの寄港地があったと推定されている（平凡社 1882）。

亀のくびといへる所をいで、まかるとてよめる

たつのゐる亀のくびよりこきいで、心ほそくも眺めつる哉

また、鎌倉幕府はここに警固役所を置き、海賊等を取り締まった。これらのことから倉橋島が瀬戸内海の航路上の重要な場所であったことを伺うことができる。

さらに、江戸時代に入ると、瀬戸内海有数の和船建造地として栄えた。

②「海軍発射場」

明治19年（1886）に大日本帝国海軍の鎮守府の一つを呉港に置くことが定められた。それに付随して、倉橋島は海軍鎮守府の軍港域に入ることになった。明治30年（1897）以降、呉鎮守府内に呉海軍造兵廠と造船廠等が設置され、戦艦等が建造された。大口径の大砲の発射試験場が必要となり、明治33年の上申書の中では「亀ヶ首」が第一候補として挙げられ、同年10月には用地買収が終了し、火薬装填並格納所等の建設が着手された（道岡 2014）。

台紙に書かれた「海軍発射場」はこの大砲等の発射試験場のことであると推測できる。

③「鑄夷所ノ址ト思ハル」

「夷」は「錢」の異体字で、山下真里によって使用期間と用途が限定された用語であったことが指摘されている（山下 2013）。「錢」が明治4年の「新貨条例」において「円」の下の金錢単位になった頃から異体字である「夷」が使われ始め、昭和28年に金錢単位としての「錢」が廃止されると「戈」という文字を使わなくなったとされる。

和同開珎を入手した年月日が「45年1月4日」とあり、元号は明治と推測されることから、その異体字の使用期間内に入っている。

これが採集された場所は「鑄錢所の址」と思われる書かれているが、これは和同開珎が枝錢の状態で発見されたことによるものである（帝室博物館 1937）。しかし、瀬戸内海に飛び出た地形から、鑄錢所があったとは考えにくい。現在の呉市遺跡地図では、種別は「祭祀遺跡」となっている。

④「四五.一.四. 有坂鉛蔵氏ヨリ」

この台紙が書かれた時期は不明であるが、③で述べたとおり、「四五.一.四.」は「明治45年1月4日」で、有坂鉛蔵氏から和同開珎を入手したと書かれている。誰が入手したのかについては後で触れたい。

有坂鉛蔵は東京帝国大学の出身で、予備門生時代に弥生町で弥生式土器を最初に発見し、坪井正五郎等とともに人類学会の発足に尽力した人物として知られている。歴史にも造詣が深かったが、本業は海軍の軍人であった。発射試験場の建設の頃、ちょうど有坂鉛蔵は呉海軍造兵廠に赴任していた。偶然発見された和同開珎が今日伝わっているのは、有坂鉛蔵が関わったからであろう。

(2)亀ヶ首出土和同開珎

亀ヶ首から出土した和同開珎はいくつかの文献に取り上げられており、時代順に以下紹介したい。

①「名物錢乃話 状袋が破れて古和同錢」『古錢』第8卷第11号（大正13年11月）大阪古錢雑誌社 14～19頁

今から數えて七年前の大正七年三月に（前略）安藝発見の銅古和同錢背鏹邊のあるものは廣島縣安藝郡の某氏から私宛に送って來た（中略）何となれば軽々しく見てをつた品が古和同で然も背に鏹邊がある品が手紙の破れから飛出した（後略）

廣島縣安藝郡倉橋島村大字龜の首（一つの小島）発見年月日不明より他品と一緒に發掘した然れども他品は皆人に呉てやり今は手元に此品一品よりない貴下に御任せするから相當の價格があれば買入れ代金は小為替で送って下さいと申添へてあつたがコンナ珍品は其な安いものではないと其頃は大奮發の五十圓に買入る由申上て回答を待つて送金した事がある今は此品は御影の飛香館藏品となつてをる（後略）

※和同開珎1枚の拓本の表裏が掲載されている。

※古錢商が入手した古錢の中からエピソードのあるものを取り上げて紹介した中に、亀の首から出土した和同開珎が登場している。「御影の飛香館」は黒川古文化研究所を作った三代黒川幸七の先代が兵庫県武庫郡御影町（現神戸市御影）に造った別荘で、多くの古美術品が収集された。この和同開珎は『古錢』第二巻に飛香館藏として紹介されているものと同一である。

②「異品錢之紹介（其十五）」『古錢』第2巻第7号（大正7年7月）大阪古錢雑誌社 1頁

銅鑄古和同開珍錢 重壹匁參分貳厘 大阪 黒川飛香館藏

最近廣島縣某地方發掘錢數品の一にして（後略）

※和同開珎1枚の拓本の表裏が掲載されている。

③『天平地寶』帝室博物館 昭和12年 55頁、図版93

枝錢（原寸大） 東京市 柴田常恵氏藏

廣島縣安藝郡音戸町瀬戸島亀ヶ首海軍試射場から有坂鉛蔵氏が發掘されたもので、もと数枚一連になつたものから二枚折り取つたものと云ふ。縁に残存する銅片は折取りの痕で、通貨には之を去り磨きをかけて後用ふを常とする。和同開珎の書體は前掲図版の[3]と一致し和同錢の普通な型である。出土地の瀬戸島の遺蹟に就いては未だ詳しい調査を聞かないが、果たして所傳の如くであるならば此處にも奈良朝の鑄錢所が設置されてゐた事になる。

※図版93に掲載された2点の写真と本稿で紹介している和同開珎を比較すると、バリの残り方、穿が埋まっている状態から8の方と一致する。よって、本稿で紹介している和同開珎は柴田常恵の旧蔵品であったことが判明した。

この図録の資料名は枝錢となっているが、写真掲載の2点和同開珎は枝錢ではなく、単体の状態である。

柴田常恵の写真資料や拓本資料の一部は現在、國學院大學の所蔵資料となっており、デジタル化・データベース化され、目録も刊行されている（國學院大學日本文化研究所 2006、國學院大學學術資料館 2011）。この中にも、関連する和同開珎が収録されていた。

④『柴田常恵写真資料目録Ⅱ』（國學院大學日本文化研究所 2006）

ア 資料番号3543として和同開珎2枚の裏表の写真が掲載されている（291頁）。それに添えられた説明文は下記の通りである。

安藝瀬戸島亀ヶ首 海軍発射場 四五、一、四 右□□ 右量一匁〇五分 左一匁
本稿で紹介している和同開珎はこの写真の左と一致する。

イ 資料番号4675として和同開珎4枚の拓本が掲載されている。台紙の右下に「有坂」と記されている(291頁／本稿図2)。本稿で紹介している和同開珎はこの拓本4枚のうち、一番右の拓本と近似している。

⑤『柴田常恵拓本資料目録』(國學院大學研究開発推進機構学術資料館 2011)

V-5-4とされた「古銭」という袋に納められた中に「陸中稗貫郡上根村字熊堂古墳 八木源次郎氏蔵」と「安藝呉市瀬戸島亀ヶ首 有坂鉛藏氏蔵」と題する2種類の拓本が1枚の台紙に貼られたものがある(215頁／本稿図3)。亀ヶ首とある拓本は先に紹介した④イに掲載された写真と同一で、④イでは「有坂鉛藏氏蔵」の下半が切れているものと思われる。

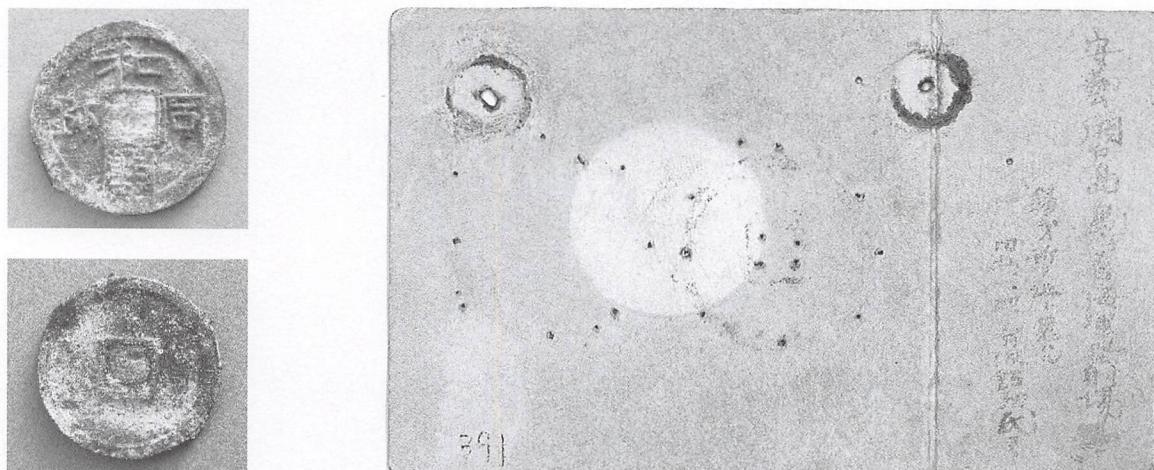


写真1 呉市亀ヶ首出土和同開珎とその台紙 (ほぼ実寸大)

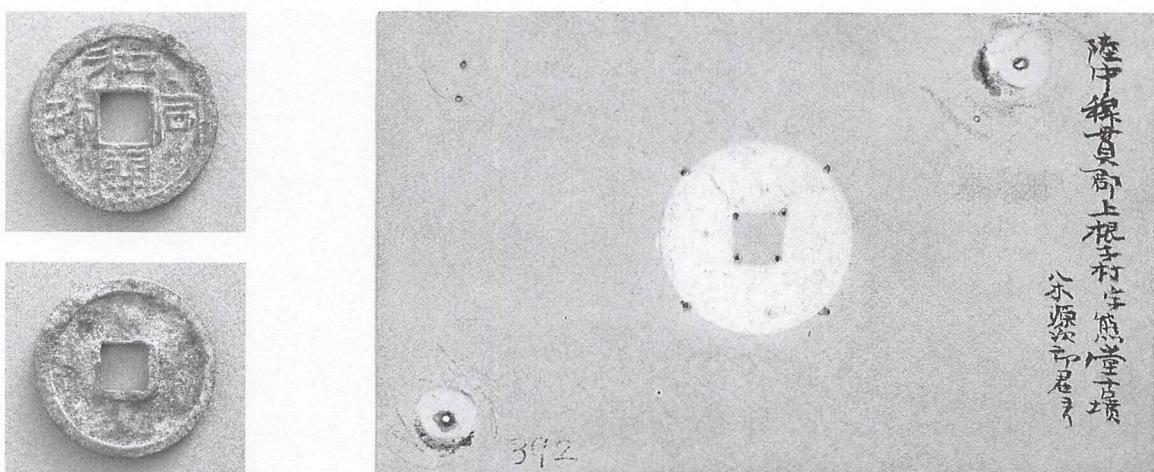
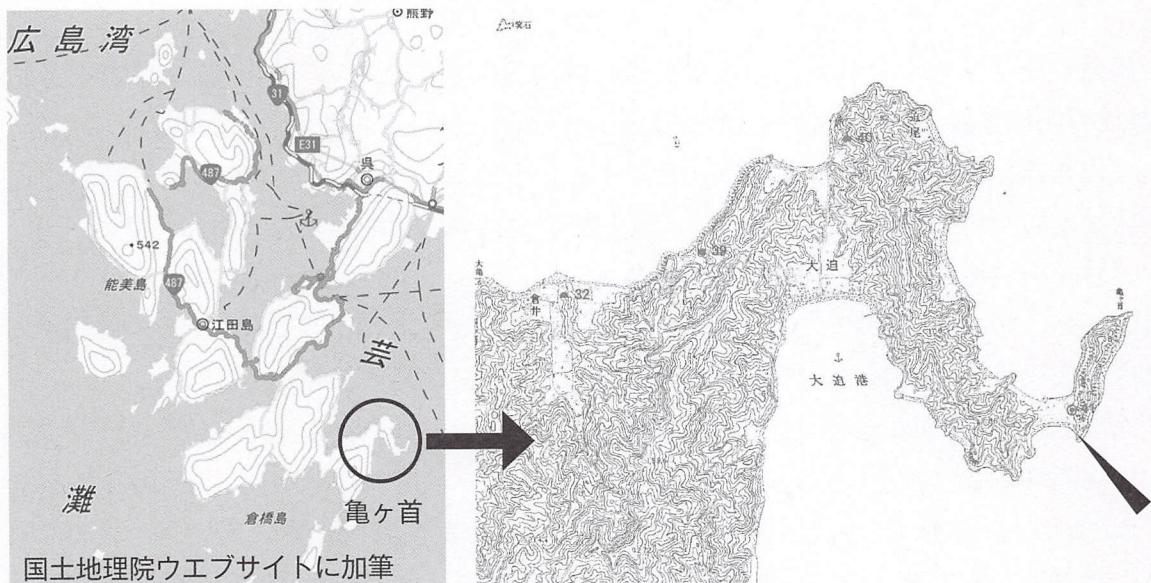


写真2 花巻市熊堂古墳出土和同開珎とその台紙 (ほぼ実寸大)



国土地理院ウェブサイトに加筆

図1 呉市倉橋島亀ヶ首遺跡の位置

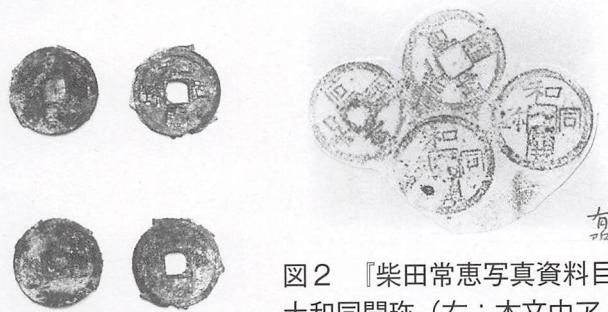


図2 『柴田常恵写真資料目録Ⅱ』(國學院大學 2006)に収録された亀ヶ首出土和同開珎(右:本文中ア、左:本文中イ)

(國學院大學博物館蔵・写真提供)

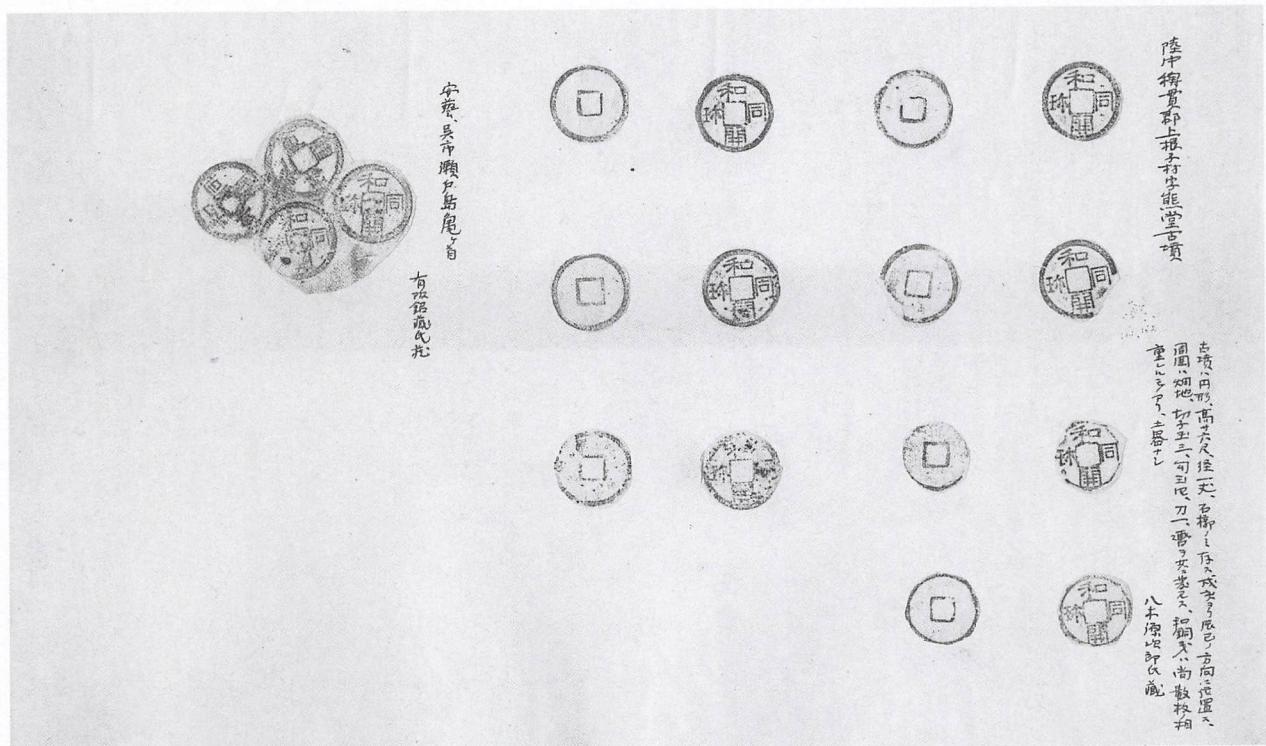


図3 柴田常恵拓本資料 (國學院大學博物館蔵・写真提供)

(3)小結

ここで紹介した文献を総合して考えるならば、呉市亀ヶ首に海軍の発射試験場が建設された際、複数枚の和同開珎とともに遺物群が出土した。『天平地寶』の解説文からは、出土した時、和同開珎は枝錢の状態で、複数枚が繋がっていたようである。古錢商に1枚の和同開珎を郵送した人物は氏名が明らかになっておらず、有坂鉛蔵なのか、別の人物なのかは不明である。古錢商への手紙の文面からは、差出人が第一発見者で、その人物が有坂鉛蔵へ和同開珎を渡した可能性が高いのではなかろうか。いずれにせよ、有坂鉛蔵が建設工事中に偶然発見された和同開珎を数枚所蔵しており、その中の2枚を柴田常恵に譲ったことは事実であろう。

しかし、埼玉県へ寄贈された時点では、和同開珎は1枚となっていた。台紙を再度観察すると、真ん中に和同開珎が1つ固定されていた部分が白く残っている。それに対して、和同開珎を並列して2点貼り付けた針孔が観察できるが、この部分は変色していない。当初、2点の和同開珎がこの台紙に糸で貼りつけられていたものが、その後、1点となったことが推測できる。

現在残っているものは穿がふさがっており、針孔の痕跡からは向かって左に現存する和同開珎が固定されており、右は現存しない和同開珎が固定されていたのではないだろうか。

2 岩手県熊堂古墳群出土和同開珎(写真2)

この和同開珎は外径約2.5センチ前後、厚さ0.15センチ、重さ2.1グラムある。錢の縁の1か所にバリが少し残っている。縦6センチ、横10センチの台紙に糸で固定されていた。台紙に残る画鋲の痕が三か所あり、画鋲で壁か台に固定して展示されていた痕跡と考えられる。

右端に下記のように由来が墨で書かれている。

陸中稗貫郡上根村字熊堂古墳 八木源次郎君ヨリ

(※台紙左下端の「392」という数字は埼玉県に受け入れる際に付けた仮番号である。)

熊堂古墳は岩手県の中央部花巻市上根子字熊堂に所在し、十数基からなる古墳時代終末期の古墳群である(佐々木他 1990)。江戸時代・明治時代から盗掘された古墳群のため、破壊されたものも多い。盗掘時に蕨手刀や和同開珎、多量のガラス玉類などが出土した。

この古墳群についての文献のうち、主だったものを表1にまとめてみた。江戸時代から識者には知られていた古墳群のようである。

明治35年(1905)に稗貫郡長である加藤夫妻によって大規模な盗掘が行われ、和同開珎を含む多くの遺物が出土した。その情報は明治38年稗貫郡花巻川口町在住の東京人類学会会員・八木源次郎から柴田常恵に伝えられ、柴田は翌年、八木氏の案内で現地を訪れている(柴田 1906)。また、古錢を発掘した老婦(稗貫郡長の加藤夫妻であろうか)から盗掘時の様子を聞き取りしている。

①「東北地方踏査概要」東京人類學會雜誌第21-243 明治39年 346頁

和同錢の出でたる古墳は二個にして、一は和同錢二枚と曲玉、切子玉、朝鮮土器を出し、他のよりは七枚を発掘し、構造は他の古墳と同様にて、何れも地平線以下より獲たりとの事なり。

この記述に従えば、和同開珎はこの盗掘によって9枚出土したことになる。

この台紙に書かれた「八木源次郎」と、熊堂古墳の現地を案内した人物「八木源次郎」が一致しており、この和同開珎は明治38年の現地踏査の際、柴田常恵が八木源次郎から手に入れたものと推測できる。

②國學院大學博物館蔵「柴田常恵拓本資料」の中に熊堂古墳出土の和同開珎7枚の拓本が収められている(図3／國學院大學2011)。その台紙の右端には以下のように記されている。

陸中稗貫郡上根子村字熊堂古墳

古墳ハ円形、高サ六尺、径一丈、右櫛ノミ存ス、戌亥ヨリ辰巳ノ方向ニ位置ス、

周囲ハ畠地、切子玉三、勾玉四、刀一、轡ヲ共ニ発見ス、和銅錢ハ尚數枚ノ相

重レルモノアリ、土器ナシ

八木源次郎氏蔵

これら7枚のうち、一番右上の拓本が本稿で紹介している和同開珎に近似している。

③「和同錢を出した陸中國 熊堂の古墳群」考古學雜誌第14-7 大正13年 346頁

この古墳群については小笠原迷宮も一文を書いている。それには①には書かれていない情報も入っていた。

明治三十五六年頃土地の人達は其の残部を殆んどを発掘して今日の慘状を呈して居るのは、時の稗貫郡長加藤炳氏夫妻が玉類を欲しさに此の遺蹟の残部を発掘させたのが動機となって、商人が入り込み出土品は轉賣されて郷土には一物も残さない様になつたのである。和同錢の副葬品として出たのもこの時で、(中略)八木氏は發掘に従事してその出土品を賣買した人なそうである。(後略)

また、この論考の中には大正12年に地元の上中小学校が内務省史蹟天然記念物考查委員である柴田常恵に提出した報告の写しと、古墳の分布図も掲載されている(図4)。報告の概要は表1の通りである。和同開珎はイの地点で4枚、ロの地点で枚数不明、ハの地点で4枚出土したと記載されており、最低でも9枚出土していた。この中のハの地点出土の4枚のうち3枚が八木源次郎に売却されたことが書かれている。さらにこの中の1枚が八木から柴田へ渡ったのであろう。

③「再び陸中國熊堂古墳群に就て」考古學雜誌第15-12 大正14年 831頁

翌年、小笠原は再度熊堂古墳について書いている。

上中小學校の畠中から地主なる平賀仁太郎氏は一枚拾つたが、今はその地點に就て記憶がなくなつて居る。錢も紛失して所持して居らぬそうである。又鍛冶屋から出た一枚は花巻川口町の平野立乾氏は珍しさにいぢくつて壊して仕舞つたとの事である。

上中小學校は熊堂古墳の地区にある学校で、その付近からも和同開珎の出土があったようである。

花巻市文化財課に問い合わせたところ、現在、地元に残っている和同開珎は2枚あるそうだ。1枚は上中小學校旧蔵のもので、現在は花巻市教育委員会の所蔵となっている。もう1枚は「平野コレクション」と呼ばれる個人所蔵の中に入っている。

熊堂古墳群の和同開珎は明治時代に出土したため、総枚数は不明で、最低9枚はあったと考えられる。その中で現存するものは、今回紹介しているものと、地元に残っている2枚の計3枚のようである。

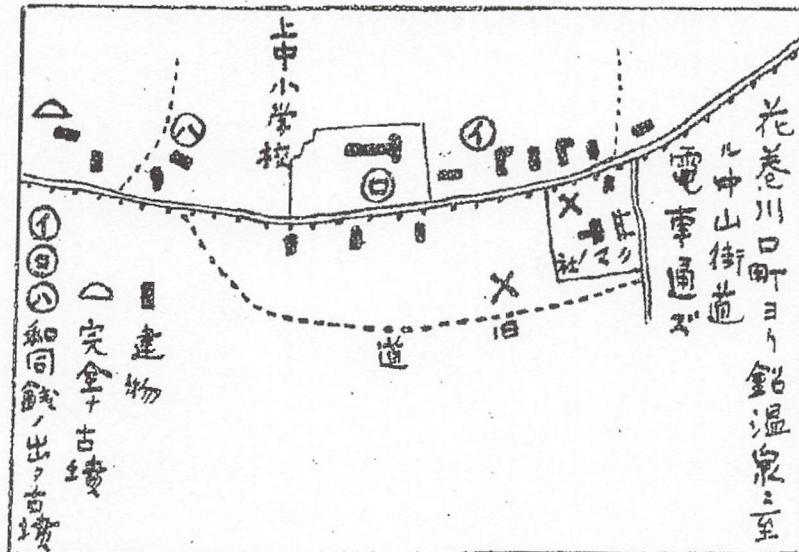


図4 小笠原迷宮作成花巻市熊堂古墳群概略図（小笠原 1924）

まとめ

今回紹介した2点の和同開珎はそれぞれ異なった地域から出土したものであるが、出土地が明記された状態で今日まで保管されてきた、たいへん貴重な資料と言えよう。

これらの和同開珎の台紙に書かれた由来の筆跡と柴田常恵拓本資料(図3)の説明文の筆跡はほぼ一致する。柴田常恵の筆跡は斎藤忠著『考古学史の人びと』(308頁／斎藤 1985)に掲載された図版によても知ることができる。これら3点の筆跡は近似していることから、和同開珎の台紙に書かれた注記は、柴田の直筆と考えられる。

筆跡や『天平地寶』(帝室博物館 1937)の「柴田常恵藏」という記載などを総合して考えると、今回紹介した2点の和同開珎は、柴田常恵の所蔵資料であったとしてよからう。

柴田常恵は明治10年(1877)に愛知県春日井郡大曾根村(現・名古屋市東区)の浄土真宗の寺の住職の三男として生まれた。明治30年に上京し、明治35年に東京帝国大学雇となり、39年には東京帝国大学人類学教室助手に就任した。『東京人類学雑誌』の編さんのかたわら、各地の遺跡や遺物の調査を実施した。その後、大正8年(1919)に史跡名勝天然紀念物法が公布されるとその考查員となり、文化財保護業務に携わった。

今回紹介した2点の和同開珎はいずれも明治40年前後に柴田常恵が現地を踏査する中で入手したものと考えられる。柴田常恵は文化財保護業務をとおして全国を調査しており、その際、相当数の資料を持ち帰って、所蔵していたようである。おそらく、柴田の死後、それらの資料や拓本、写真などは柴田家から離れ、一定の群ごとにいくつかの機関に移ったと推定される。

拓本や写真資料の多くは國學院大學に入り、デジタル化等の整理がされ、冊子も刊行された(國學院大學 2006・2011)。

旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料の中には、今回紹介したような出土地が明記された台紙

を伴っているものが多くみられる。また、埼玉県指定文化財となっている「古瓦」は目録⁽¹⁾が刊行されており、その冒頭には以下のように書かれている。

柴田常恵先生が明治、大正、昭和に涉って考古学の普及発展に努力した功績は実に大きい。

先生が五十三年間研究蒐集された、日本全国古瓦の目録であります。

以上のことから、旧長瀬綜合博物館の資料の中には、柴田常恵旧蔵の多くの資料が入っているものと考える⁽²⁾。

本稿を草するにあたり、下記の方々にお世話になった。ここに記して、感謝の意を表したい。
志水 志保、瀧瀬 芳之、遠山 翠、野中 仁、橋本 征也 (五十音順、敬称略)

《註》

- (1) この目録は330番、30頁までしか残っておらず、おそらく奥付を含め、最低2ページを欠いている。そのため刊行者・刊行年不明である。この「古瓦」は、宮城県多賀城跡から西は福岡県太宰府跡まで、総数338点の一大コレクションである。
- (2) 倉澤麻由子が資料紹介した富山県氷見市朝日貝塚の骨角器も柴田常恵旧蔵資料と考えられている（倉澤 2016）。

《引用・参考文献》

- 大阪古銭雑誌社 1918 「異品銭之紹介(其十五)」『古銭』第2巻第7号 大阪古銭雑誌社
小笠原謙吉 1925 「再び陸中國熊堂古墳群に就いて」『考古学雑誌』第15巻12号
小笠原迷宮 1924 「和同錢を出した陸中國熊堂の古墳群」『考古学雑誌』第14巻7号
國學院大學日本文化研究所 2006 『柴田常恵写真資料目録Ⅱ』
國學院大學研究開発推進機構学術資料館 2011 『柴田常恵拓本資料目録』
倉澤麻由子 2016 「旧長瀬綜合博物館からの寄贈資料 - 富山県氷見市朝日貝塚の骨角器 - 」『埼玉県立史跡の博物館紀要』第9号
倉橋町 2001 『倉橋町史 通史編』
斎藤忠 1985 『考古学史の人びと』 第一書房
佐々木清文他 1990 『熊堂古墳群・浮島古墳群発掘調査報告書』岩手県立博物館調査研究報告書第6冊 岩手県立博物館
柴田常恵 1906 「東北地方踏査概要」『東京人類學雑誌』第21巻243号
島村孝三郎 1893 「岩手縣下ノ古墳及び石器時代ノ遺跡」『人類學雑誌』第9巻91号
帝室博物館 1937 『天平地寶』
平凡社 1882 『日本歴史地名体系 第35巻 (広島県の地名)』
道岡尚生 2014 「吳軍港の周辺一海軍施設の設置とその影響ー」『吳市海軍歴史科学館 研究紀要』8号
八木奘三郎 1899 「東北地方に於ける人類學的旅行」『人類學雑誌』第15巻165号
山下真里 2013 「「錢」の異体字「戈」の盛衰とその要因」『日本語の研究』第9巻4号
作者不詳 1924 「名物銭乃話 状袋が破れて古和同錢」『古銭』第8巻第11号 大阪古銭雑誌社刊行者
刊行年不明 『塩谷覚三郎氏所蔵全国古瓦目録』

	西暦	和暦	人物・著者	文献 1	文献 2	備 考
1	1726	享保 11 年	松井道円	和賀稗貫郷村志	史 28-2-004	
2	1772 ~ 1800	安永～寛政年間	大巻秀詮	邦内郷村誌 卷 7		上根子村の項目に「熊野社 昔根子領主崇敬之云。此社後西北名蝦夷塚。古墳壘々不知何幾年。往古土民掘崩其塚一二為□。其中如力類者腐敗僅殘焉。柄頭飾白銀。其重三十目許。」とある。
3	1774 ~ 1857		横川良介	内史略 前五		寛政 11 年 (1799) 八幡林代官・星川茂衛 (吉寛) が発掘と記述あり。白玉 1、刀の出土と共に、石積みの主体部の記載がある。
4	1893	明治 26 年	島村孝三郎	岩手縣下ノ古墳 及び石器時代ノ 遺跡	人類学雑誌 9-91	
5	1899	明治 32 年	八木樊三郎	東北地方に於ける人類學的旅行	人類学雑誌 15-165	
6	1905	明治 38 年	柴田常恵			八木源次郎氏から花巻付近の古墳から和同錢を採集したとの連絡が入る。
7	1906	明治 39 年	柴田常恵	東北地方踏査概要	東京人類学 雑誌 21-243	東北地方踏査の中で、稗貫郡花巻川口町に会員八木源次郎氏を訪ね、前年に連絡を得た古墳から和同錢が出土した事実を確かめた。この時、古錢を発掘した老婦から聞き取り調査を実施。
8	1924	大正 13 年	小笠原迷宮	和同錢を出した 陸中國熊堂の古 墳群	考古学雑誌 14 - 7	郡長加藤夫妻が盗掘し、出土品は売買され、地元から持ち出された。八木源次郎氏は発掘に従事し、出土品を売買した人だと記されている。 (引用された大正 12 年に上中小学校が内務省史蹟名勝天然記念物考查委員柴田常恵氏に提出した報告写し) イ 藤原萬蔵宅後：明治 34 年に和同開珎 4 枚、直刀 1 振、玉類なし。所有者小原マキはこれらを売却したと聞くが、行方不明。 ロ 上中小中学校より西約 50 間：大正 4 年に和同錢外直刀出土。上中小学校蔵。 ハ ロより約 50 間西、藤原喜八宅。藤原喜八氏が約 20 年前に勾玉 7 個、和同錢 4 枚を発掘。その錢の中で、完形 3 個を川口町の八木源次郎に売却した。1 つ破損したので捨てた。 (イ～ハは本稿図 4 に対応)
9	1925	大正 14 年	小笠原謙吉	再び陸中國熊堂 古墳群に就いて	考古学雑誌 15 - 12	

表 1 熊堂古墳群関連文献一覧